

## 平成20年度「岩手・生と死を考える会」活動報告

中村 一基\*・千田 浩\*\*

(2009年3月4日受理)

Kazuki NAKAMURA and Hiroshi CHIDA

The 2008 Report of the Committee on Considering Life and Death

## (1) 中村代表あいさつ

今年度も活動報告をまとめることが出来るのは、ひとえに会の活動をきちんと記録してくれた千田君のおかげである。「継続は力なり」という言葉があるが、少人数でも、なんとか継続できているのも、千田君や阿部也寸志君、そして会の連絡等を担当してくれている伊藤さんの「妹の力」によるものである。今年度の活動については、千田君のまとめにも書かれているが、高校の国語の教科書『国語総合』の小説教材に絞って、「生と死を考える教材」として検討した。その検討は継続しているので、検討しつつある、というのが正しいかもしれない。人文系の大学教員中村と高校の国語の教員千田君との共通の対象として、高校の国語の教科書が選ばれたのは自然な流れであった。死生観を、教材を通して生徒たちと話し合う場面が多くなれば、これも「いのちの教育」の展開であると思う。また、今年度から高校の福祉の教員として教育現場に関わるようになった阿部君が、これまでのハンドブックの指導案の実践を通して、生徒からどのような反応を受けたかを報告してくれている。なかなか健闘している。さらに、正直、今年度きりかなと思いつつも、教員の10年研修に「生と死から学ぶいのちの教育」を5年間続けられたのも、千田君や阿部君の協力があつたればこそである。気がつけば50人近くの岩手の小・中・

高の教員に、全国の「いのちの教育」の動向を把握できる範囲で話してきたことになる。今年度は『死生学』全5巻（東京大学出版会）が発刊されるなど、『死生学』という＜生と死＞を見据えた《総合の学》が明確に意識された年であったと思う。個人的には、自分の関心が、学問分野として認知されたと密かに確信した年でもあった。2009年度の話になるが、4月から、5年ぶりに、教育学部3年生を対象に、「死生学といのちの教育」というテーマで『総合演習』を行うことになった。学生との対話によって、現代の＜生と死の景観＞がどのように描かれるか、しんどい演習になることを予感しながらも楽しみである。

## (2) 「岩手・生と死を考える会」の活動について

本「岩手・生と死を考える会」は、「生と死を考える全国協議会」の活動目標である「死への準備教育・ホスピス運動・死別体験者のわかちあいの場づくり」という3つの目標を意識しながらも、設立時の場の設定として、「(1) 教育現場における『生と死の教育』『死への準備教育』についての学習の場とする。(2) 生涯学習の一環としての上記の教育について、総合的に学ぶ場とする。(3) 『総合演習』（大学での演習・中村担当）の発展の形も取る。」と定めており、最終的には岩手県の教育現場に根ざした「生と死の教育」プログラ

\* 岩手大学教育学部教授

\*\* 岩手県立大東高等学校教諭

ムの開発作成・実践を目指している。この点が、本会の最大の特徴である。全国に54ある「生と死を考える会」の中でも「死への準備教育」に活動を特化していることが、本会の特徴である。

代表中村も、「岩手県教職員10年経験者研修」《現代的な教育の諸問題》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」を担当しており、平成20年度で第5回を数える。本研修は、岩手県教育委員会主催の研修の一環であり、このような形で、教員が「生と死の教育」を学ぶ機会がある県も全国的には珍しいと考える。

### (3) 活動の状況

#### 平成19年度

- 第1回（2007／4／14・通算72回）研究会「今後の活動の方向性について(1)」(担当：千田)
- 第2回（2007／4／28・通算73回）研究会「今後の活動の方向性について(2)」(担当：千田)
- 第3回（2007／5／12・通算74回）研究会「今後の活動の方向性について(3)」(担当：千田)
- 第4回（2007／5／19・通算75回）研究会「『国語総合』に見る生と死」(現代文編担当：中村・古典編担当：千田) 懇親会
- 第5回（2007／6／9・通算76回）研究会「『高等学校学習指導要領公民編』における『いのちの教育』の位置づけについて」(担当：阿部)
- 第6回（2007／7／14・通算77回）研究会「小宮山宏『地球温暖化問題とは何か』を題材にした国語科と公民科における共同授業指導案についての素案」(担当：阿部)
- 第7回（2007／8／12・通算78回）研究会「小宮山宏『地球温暖化問題とは何か』」(担当：千田)  
「子どもを取り巻く環境の変化と諸課題について」(担当：阿部) 懇親会
- 第8回（2007／8／25・通算79回）「鬼頭秀一『共生』とは何か？」(担当：千田)
- 第9回（2007／9／15・通算80回）「死者のゆくえ」(担当：中村)「安全は証明できない」(担当：千田)

第10回（2007／9／29・通算81回）「『安全は証明できない』(池内了)を題材にした現代社会の授業」①(担当：阿部)

第11回（2007／10／6・通算82回）「『安全は証明できない』(池内了)を題材にした現代社会の授業」②(担当：阿部)「クローン問題と現代の幻想」「サイボーグとクローン人間」(担当：千田)

第12回（2007／12／1・通算83回）「生と死を考える会全国協議会の動向」(担当：千田)「10年研対策」(担当：中村)「発達障害と触法行為」(担当：阿部) 忘年会

第13回（2008／3／22・通算84回）「豚のPちゃんと32人の小学生」「平成20年度活動方針について」(担当：千田) 懇親会「『いのちの教育ハンドブック第2集』完成を祝って」

#### 平成20年度

- 第1回（2008／4／19・通算85回）「ビデオ『豚のPちゃんと32人の小学生』」(担当：千田)
- 第2回（2008／4／26・通算86回）「高等学校専門教育におけるいのちの教育の実践」(担当：阿部)「現行『国語総合』教科書収録の説明的文章教材の動態」(担当：千田)
- 第3回（2008／5／10・通算87回）「小説教材『花野』一川上弘美（東京書籍）」(担当：千田)「我が国における自殺（自死）の概況」(担当：阿部)
- 第4回（2008／5／31・通算88回）「小説教材『神様』一川上弘美（筑摩書房）」「ホネになったらどこへ行こうか（内藤理恵子）」(担当：千田)
- 第5回（2008／6／14・通算89回）「全国協議会について」(担当：阿部)
- 第6回（2008／6／28・通算90回）「中島敦『山月記』について」(担当：千田)
- 第7回（2008／7／20・通算91回）「ポスター発表について」「小説教材について」(担当：千田)
- 第8回（2008／8／23・通算92回）「ティム・オブライエン／村上春樹訳『待ち伏せ』について①」(担当：千田) 懇親会
- 第9回（2008／9／27・通算93回）「ティム・オブライエン／村上春樹訳『待ち伏せ』について②」(担当：千田)

第10回（2008／10／4・通算94回）「江國香織『草之丞の話』」「東京・生と死を考える会」（担当：千田）

第11回（2008／10／11・通算95回）「朝コラム命の値段について」（担当：阿部）

第12回（2008／11／15・通算96回）「朝コラム命の値段その後…について」（担当：阿部）「東大入試国語至高の第2問」「三木卓『砲撃のあとで』」（担当：千田）懇親会

第13回（2008／12／20・通算97回）「岩手県教職員10年経験者研修について」（担当：中村）

第14回（2009／2／7・通算98回）「小説教材『焚り』辻邦生（桐原書店）」（担当：千田）

第15回（2009／3／14・通算99回）「小説教材『モモ』ミヒヤエル・エンデ（筑摩書房）」（担当：千田）

#### （4）今年度の活動について

2003年に設立した本会は、上記のような活動を継続している。

今年度は、特に高校の国語の教科書である『国語総合』の小説教材に絞り、『『国語総合』に見られる生と死の諸相』を中心に、指導案の検討や教科を跨る指導法の模索を続けている。

また、「生と死を考える全国協議会2008年度全国大会」（2008年5月17日～18日実施）（阿部参加）、「東京・生と死を考える会」主催の「第7回夏期セミナー いのちの教育実践のための研修会2008—いのちの教育…それは人と人とのつながり—」（2008年7月27日実施）（中村・阿部・千田参加）等、会員それぞれが研修会に積極的に参加し、研鑽を深めている。

今年度の会の活動の特徴としては、高校の国語の教科書である『国語総合』の小説教材に絞って、「生と死を考える教材」を検討した点が挙げられる。昨年の最初の段階では、現代文編と古典編に分けて分担し、荒いフィルターをかけて、現代文編を中心に会員同士で検討した。その結果、教科

を跨って、あるいは教科を超えて指導できそうな教材が多数あることが判明した。具体的には、メンバーの構成を考えて、国語と公民での共同の指導案ができないかという検討に入っている。教科指導を超えての実践は、「生と死の教育」においても実践例がなく、この試みは画期的なことではないかと考えている。その検討の範囲を今年度は小説教材に絞って実施している。その過程では、高校で扱う小説教材特有の特徴があるのではないかと、現代の高校生の読む小説とは、携帯小説の可能性というような様々な問題を派生させつつも一定の成果を上げているのではないかと自負している。次年度は、総括的なことを試みたいと考えている。また、平和教材の新しい可能性を模索したい。

「生と死を考える会全国協議会」の2008年度の全国大会が、神奈川県横浜市で開催された。会を代表して、阿部会員が参加した。音楽性豊かな大会で、講師の先生方も音楽を楽しんでいるということが印象的だったということである。「大和・生と死を考える会」の意気込みが伝わる全国大会であった。テーマは、「呼応するいのちの気脈」であり、会長である高木先生の講演でも「今のご自分のこころの叫びは何ですか？」その叫びに対して、「どうしたいの？」と寄り添うことの大切さを語られたという。来年度の全国大会は、2009年10月3日（土）～4日（日）に、聖トマス大学（旧英知大学）〔尼崎市若王子2-18-1〕で開催される予定である。（テーマは「悲嘆ケアの教育」であり、「兵庫・生と死を考える会」が担当する。）

「東京・生と死を考える会」主催の「第7回夏期セミナー いのちの教育実践のための研修会2008—いのちの教育…それは人と人とのつながり—」（2008年7月27日実施）にポスター発表担当で「岩手・生と死を考える会」も参加した。今回の講演者は、「いのちの授業」の実践者である山田泉さんであった。朝日新聞社の上野創さんの尽

力で実現した講演であった。山田先生の一途さと偉大さを感じる素晴らしい講演会であった。山田泉さんは、「生きているということは、人のために尽くすこと」と大分市内の病院で亡くなる数時間前、昏睡状態の中、目を見開いて発した言葉だそうです。「最期まで授業をしているんだね」。ベットの傍らで、家族や医師らは顔を見合わせたという。彼女の渡した命のバトンは、確実に彼女の授業を受けた生徒たちに受け継がれていることを確信しています。ご冥福をお祈りします。

代表中村が「岩手県教職員10年経験者研修」《現代的な教育の諸問題》での講座「生と死から学ぶいのちの教育」を担当しており、今年度で第5回を数えるが、昨年度に引き続いての今年度の特徴は、参加者の多さにあった。開講した講座の中でも1、2を争っている。校種で言うと、高校2名、中学校6名、小学校4名の11名の教職歴10年の先生方を迎えて開講することができた。中学校の先生方の参加が圧倒的に多かった。

昨年度に比べると、今年度参加の先生方は、謙虚な方々が多く、発言は少なかったが、「生と死の教育」を意識しているかどうかは別として、道德教育等で様々な実践を試みているようであった。参加した先生方の今後の実践に期待したい。

## (5) 今後の方向性

全国的には全体的に低調とも言える「生と死を考える会」の活動ではあるが、一部の先生方の試みは注目され、また天才的とも言える授業技術を發揮して展開されている。本会は、普通の教師が普通に実践できる授業カリキュラムの開発を模索し、今後とも「生と死を考える会全国協議会」等の動向も視野に入れつつも、岩手独自の活動を展開していくことを目指している。また、全国でこの教育に携わっている先生方は、研究会等で話を聞くと、連帯ではなく、孤立感を持っているというのが実情であるという。そのような先生方とも交流しながら、今後も「生と死の教育」の実践・

普及のために取り組んでゆきたいと考える。

年度末には、今年度の活動の総括として、「岩手・生と死を考える会」編集の『いのちの教育ハンドブック第3集』発刊予定である。今までの活動を蓄積しつつ、来年度の活動を地道に続けていきたい。

## 【資料】

第3回（2008／5／10・通算87回）「岩手・生と死を考える会」例会記録

会場：岩手大学図書館グループ演習室

時間：14：00～16：00

参加者：4名（中村、阿部、伊藤、千田）

### ① 「小説教材『花野』—川上弘美（東京書籍）」 （担当：千田）

高校の教科書『国語総合』から「生と死」を考える小説教材を取り上げた。

死者とのコミュニケーション なつかしさを基調とするもの・恐怖を基調とするもの

食べ物→日常性を象徴

映画「異人たちの夏」を思い起こさせる

難解ではなく、読みやすい小説であり、高校生と「生と死」を語る素材としては利用可能。

今後、他の教材と比較検討予定、アンソロジー作成

### ② 「我が国における自殺（自死）の概況」（担当：阿部）

焦点となるのは、中高年、硫化水素での自殺事件、メディアとの関係あたりか？

今回は概況から再確認

自殺者数の年次推移

平成10年以降、男女比率 男性3：女性1  
職業別自殺者数の年次推移

平成10年度から自営者、被雇用者、無職者の自殺が急増

男女・年齢別自殺者数（平成18年度）

原因・動機別自殺者数（平成18年度）

健康問題、経済・生活問題

対人口比で見た性・年齢階級別自殺者数の推移  
地域差

平成20年5月17日（土）～18日（日）に神奈川県民ホールで、「生と死を考える会全国協議会 in 神奈川」が開催されます。31日（土）の例会では、安部会員から全国大会の報告、全国の概況についての報告がある予定です。

第4回（2008／5／31・通算88回）「岩手・生と死を考える会」例会記録

会場：岩手大学図書館グループ演習室

時間：15：00～17：00

参加者：2名（中村、千田）

① 「小説教材『神様』一川上弘美（筑摩書房）」  
（担当：千田）

(1) このようなシュチュエーションの願望

(2) ミンチにして流すか？隣人は何者なのか？  
外見に惑わされているだけで、人の皮をかぶった何か？

高校の教科書『国語総合』から「生と死」を考える小説教材を取り上げた。

異文化交流 異類婚 なまなましくない→なぜ川上弘美が小説教材として取り上げられるのか？

童話 メルフェン ファンタジー 動物と自在に話すーナルニア

くまは、ある種のジェントルマン（紳士）、関係性の中で無理強いしない

くまに象徴されているのは日本的な状況

他に「川上弘美」の作品は、国語総合の教科書に取り上げられているのか？

なぜ「川上弘美」の小説が取り上げられるのか？

② 「ホネになったらどこ行こうか（内藤理恵子）」（担当：千田）

ホネになったら、ダイヤになるの

遺骨をダイヤに加工する業者がある - 手元供養

ホネの聖地高野山に行ってみよう

6月の予定

6月14日（土）15：00～17：00 グループ演習室

阿部さんに全国大会の報告をしてほしい。

6月28日（土）15：00～17：00 グループ演習室

7月初め 中村先生登場の演劇あり

「東京・生と死を考える会」主催

第7回夏期セミナー いのちの教育実践のための研修会2008 —いのちの教育…それは人と人とのつながり—

岩手・生と死を考える会

岩手・生と死を考える会代表：中村一基（岩手大学教育学部教授）

阿部也寸志（岩手県立一関第二高等学校教諭・福祉科）

千田 浩（岩手県立大東高等学校教諭・国語科）

日時：2008年7月27日（日） 9：30～

場所：タワーホール船堀

1、「岩手・生と死を考える会」について

「岩手・生と死を考える会」は、平成15年に宗教・政治・職業・年齢に囚われることなく、誰もが自由な立場で生と死について考え、学び行動する場として発足し、主に教育現場における「生と死の教育」についての教育プログラムを考える活動を継続してきた。

2、岩手の教育現場

教育現場の多忙化ということは、いったいいつ頃から言われているのだろうか？ 岩手の高校現場では、進学実績の向上のためという美名のもと、ゼロ時間目から課外までの業務、部活動指導、校務分掌、生活指導等の多忙が続いている。このことをいくら叫んでも、「教職員は給料が高い、長期休業もある」という外からの評価を受け、新昇給制度などの外圧で、教員間の関係もギクシャクしているのが現状である。

### 3、共同授業案について

平成19年度は、教育現場での「生と死の教育」にかかる授業時間の確保が難しい中で、その解決策の一つとして共同授業案という構想が生まれた。

「岩手・生と死を考える会」のメンバーとして、高校の国語科・公民科の教師が中心となりカリキュラム編成に当たっていたということもあり、岩手の高校生が履修する『国語総合』の教科書の中から「生と死」に関わる教材（評論教材）を代表中村が選び、その選んだ教材に関して、国語科教員と公民科教員が教材検討をし、その指導案をもとに話し合いを続けている。

平成19年度に取り上げた教材は、

小宮山宏氏「地球温暖化問題とは何か」（『国語総合』大修館書店）

池内了氏「安全は証明できない」（『高等学校標準国語総合』第一学習社）

である。指導案はできあがっているが、教員同士の所属校も違い、実践の方向を模索しているのが実際である。ただし、岩手県教職員10年研修の講師を本会代表中村が担当していることもあり、この4年間で50名近い本県の教員が受講しており、その中で実践を試みている方がいるという報告を受けている。

平成20年度は、『国語総合』の教科書の中から「生と死」に関わる小説教材をピックアップし、教材検討を進めている。また本会阿部会員も今年度から新任地に転勤したこともあり、福祉科を担当し、「社会福祉演習」という授業を受け持っている。その演習の成果が今年度末には報告できる予定である。

第7回夏期セミナー いのちの教育実践のための研修会2008

—いのちの教育…それは人と人とのつながり—

日時：2008年7月27日（日）

場所：船堀タワー

ポスター発表

ポスターを作っていかにポスター発表実施。

各自数名と会話。

講演「いのちの授業をもう一度」 講師／山田泉さん（元養護教諭）

- ・友人上野創（はじめ・朝日新聞社）に請われて講演を引き受けた。
- ・2000年発症、2005年再発、2007年転移
- ・つるべさん「一緒に授業をしましょう」「あなたの授業は映像として残しておいた方がいい」→誠実で真面目な人
- ・胸にしこり 何科に行くのが正しいのでしょうか？「婦人科」×、「乳腺外科」○
- ・校長が保健室の仕事、教育委員会から指導→「オードリーの会」、テレビ出演「彼女の活動は生きるための闘いです。応援する気持ちはあるが、指導する気はない」「わしが一番心が洗われたで」「最期まで泉ちゃんのこと頼むで」
- ・2年で戻る。保健室にメッセージ「元気になって戻ってくるからね☺」消さずに残っていたことに感激
- ・ピンチを乗り越える力は話し合う力
- ・いのちの授業～ガンを語る～
- ・教職員の代表、「自分はどう生きているのか、立ち止まることがない」
- ・NHK特集「心に響け 命の授業」

シンポジウム「『いのちの授業をもう一度』から学ぶこと」

- ・上野創さん（朝日新聞社、社会部記者）  
2度の再発、肺に転移「どうやって生きようか？」→1999年から取材  
「いのちの教育は爆発的に広がるのではないか？」という予感→実際は…
- ・小澤竹俊さん（めぐみ在宅クリニック院長）  
時間存在・関係存在・自律存在、支えは一人ひとり異なる
- ・小松良子さん（江戸川区立鹿骨小学校副校長・養護教諭）  
右肩上がりのみを教えるのが学校なのか？、

命を深く考えること、あり続けようとする生命力、「学校―保護者―地域の力」地域の既存の組織

・山田泉さん

子どもの発想を借りる

説得のワザ→教員に悪人はいない、「子どものことで」「誰々君に会わせたい」

教職経験者10年研修会「生と死から学ぶいのちの教育」〔現代的な教育課題〕

日時：平成20年12月25日（木）～26日（金）

場所：岩手大学人文社会科学部3号棟11演習室  
12月25日（木）

参加理由（11名参加、小学校3名・中学校6名・高校2名）

※道徳や特別支援教育、研究授業を通して興味関心を持った方と個人的興味、他の選択がなかった方と様々でした。中には校長先生から勧められたという方もいました。

中村

- ・「いのちの教育」は臨界期に来ている。各県の教育委員会には温度差がある。
- ・沢内村の深沢村長を扱った映画で、マタギが兎の皮をはぐシーンがある。鍋にして食べる。日常では目にしない場面。
- ・東京では11月公開の「ブタのいた教室」、子供たちには台本がなく、結末が書いていない台本が渡された。ドキュメントに近い映画。  
「いのちの授業900日～ぶたのPちゃんと32人の小学生」【ドキュメント40分、VHS】
- ・Pちゃんはかわいしいし、掃除をするのが楽しい。社会見学、家庭科では豚肉料理。中国人留学生を招き、豚足。
- ・1年目で、100kgを超える。家畜かペット（アイドル）か。食肉センター見学参加。24人／32人。1年間で日本人は、1人5<sup>キロ</sup>の豚肉を食べる。2,000万頭。
- ・解決策 ①引き継ぐ 27人 ②食肉センター ③農場 5人 ④食べる

→全校集会 6年2組 2／25 32枚ポスター作成→2日後 3年1組 体験飼育

・3／7 6年2組親と子の緊急会議 先延ばしにはできない時期に来ている。

・問題点 ①臭い ②汚い ③危ない ④クラス替え ⑤卒業

・①引き継ぐ ②食肉センター（学級委員長 なっちゃん）

・「いのちの授業」のひとつの形（飼育）…小学校の実践

I 先生

・食べる食べないで真剣に悩んでいる姿が印象に残っている。危機迫る状態で、Pちゃんが話せたら面白い。「おら、行かへんで！」

K 先生

・5、6年前に中学校で子どもたちと一緒に見たことを思い出した。結末を覚えていない。過程で子どもたちの悩む姿を放映したのが斬新に思えた。Pちゃんを通して段階を踏んで、いのちを食べるとは何かを子どもたちに浸透させていく。Pちゃんには情が移っていく。殺す場面を目にしないで食べているので、いのちをいただくことが実感できない。どう実感させるかというやり方が難しい。食べるということが粗末にされている時代なのかもしれない。

T D 先生

・重いテーマで、素晴らしい実践だが、私にはできないと思った。勤務校は今年閉校になるが、鶏が9羽いて、現在貰い手がない状態。うこっけいとチャボのあいの子で価値がない。譲渡先を探しているが、貰い手がなければ処分する。同じ命なのに、名前でのちを差別するのかと反省した。捕鯨反対問題。両方とも正論なので結論が出ない。（お友達以上は2人称、死の問題は、3人称、2.5人称、2人称、今のペットは家族）

O 先生

・農学部卒業で、実験動物に関しては、割り切っ

ていた。黒田先生はいい決断をしたと思う。  
イメージとして子どもたちにつらい思いを与えた。

T H先生

- ・900日は長いというのが感想。係ではなく、みんなで世話をしていた点がよい。食べるということに関しては、さらっとした扱い方になっている。(学級経営ができているかどうか?)

T K先生

- ・小学生が、中学を経過して、どんな高校生になったのかが気になった。一時のこととして忘れるのか? その時だけなのかどうか?
- ・裁判員制度が始まるが、NHKでドキュメンタリーで、最初は死刑反対だったが、当事者や遺族が、「自分は救われたような気がする」というのを聞いて、第三者として、他人事ではなく、自分のこととしてどうとらえるかを考えさせたい。

C先生

- ・いのちを大切にすることはどういうことか? 責任を取るとはどういうことか? 難しい問題。クラスがまっぴらつになったことについて、こわいなと思った。普段の生活にまで波及する可能性がある。親や他の職員をまきこみながら、1票は担任の先生に委ねられる。16対16は偶然。

N先生

- ・中学生はものを大事にしない。もったいないという考え方がなくなってくる。食べ物がどういう経路を辿ってここにきたのか?

H R先生

- ・情の移った生き物を食べられるか?

H U先生

- ・大人でも結論の出ないことを子どもたちに問うという危険性、適時性。

中村

- ・生と死に立ち会う機会がない中で、実践を行う難しさは、自分を出すということ。
- ・とまどいを共有できるか? 自分の現場では

どうできるか?

- ・「東京・生と死を考える会」では、教員の実践発表の場がある。

山下文夫先生【授業実践例・V H S】「中学保健」

T K先生

- ・考える場面があまりない。講義形式の授業。

C先生

- ・体験が生徒にすーと入っていくかどうか?

N先生

- ・珍しい形態。中学校では、対話形式がよしとされる。

H先生

- ・先生の力技。

「いのちの授業」実践例。《いのちの教育教材「生命の値段」の実践について》【阿部也寸志、報告】朝学習「コラム」の時間。

H先生

- ・中学生は、賠償金の問題としてとらえがち。

T K先生

- ・工業高校では、3年間クラスが変わらない。関係がこじれると、修復が難しい。
- ・シビアナなので、生半可な気持ちではできない。

12月26日(金)

日下義明先生(横浜の小学校の先生) 小学校2年生に蜘蛛の巣に蝶がひっかかっていた時どうするか? 捕食。女郎蜘蛛に馬鹿な蝶が捕まった。蠅だったらどうか? 人間中心主義。蝶を助ければ、蜘蛛が生きられない。多くの子どもたちは、ハムレットの心境。蜘蛛も生活しているので、そのままにしておく。蜘蛛は他の生き物を探せばよい。人間が手を出してはいけない自然の摂理。あとは、お家に帰って家で話し合う。

小学校5年生では、半数弱が自然界の法則。人間も魚を殺して生きている。生態系の頂点に人間が立っている。ごちそうさまは何のためにいうのだろうね。人間はいただきますと感謝の気持ち。人間に食べられる生き物はどう考えればいいのか? 自信を持っては言えないが、自分の命をプレゼントしてあげる。恨み、蝶の死が無意味。

鯛の生き造り、殺すなら殺したほうがいい。宮澤賢治『なめとこ山の熊』、ベジタリアン。助けるやつと助けないやつを選別。想像力の問題。

「忘れられないご馳走」（中学校・道徳）

「DNAの授業」【兵庫・生と死を考える会、原実男先生】

・DNAはどのような情報を共有しているか？塩基対30億。血を分けた兄弟でも、違うけど同じものを共有。私たちは可能性を託された存在。個体→DNAの運び屋。自分の人生を生きる。DNAを残す→小3の娘「お父さん、誰も死なないのですね」

「いのちの教育」放棄できない問題…一般の人ができないか？

TD先生

追究していくと難しい。サブカルチャー的には面白い。蝶と蜘蛛、蝶と蛾、共通のテーブルで話し合うことができる問題。

HU先生

「いのち」とは、大事だが学ばない、教えない、なかなか答えがでないので避けていた問題。「死」ということを考えると、マイナスの方向の行きがち。プラスの方向に持っていくことはできないか？殺人事件を身内が起こした生徒いた場合、話づらい。しかし、あえて命について語ることも大事なのではないか？命について意識する。数学・総合・道徳。生物的に繋がっている。宇宙はなくなる？（ピンチがチャンス）

HD先生

昨年11月に叔父が亡くなった。「いのちの価値」道徳の研究授業。日航機墜落事件の手記を活用。年に1回、あるいは、ちょっとした会話の中で生かしたい。

HM先生

題材の多彩さ。生死は一体。死を前面に出しては、自分はやれない。

NS先生

死の恐怖を生徒に伝えることができたとして、どんな心情が育つのか？いつか直面することな

のに、わざわざ教えなければならないものなのか？（デリケートな問題）

C先生

中学1年の担任。生徒の母が亡くなる。クラス全員でお葬式に参列。脳卒中。どう接していいのか？半年が過ぎたが、どう声をかければいいのか？表には出てこない心のうちはどうなのか？

「死ね」と簡単に生徒は言うが、仮想の死と現実の死の区別をどうつけていったらよいのか？

TD先生

文学部卒、日本の中世の死については語れるが、「生と死の教育」はどのようなことが行われているか？二戸地区の中学校の道徳の研究授業「モラルジレンマ」山岳隊、クレバスから転落、救助隊の隊長の決断。留意点はあるものの気楽に考えてやれるのでは？継続的でなくても、卒業までに1時間。遠野高校の元同僚、予期せぬ死。

TK先生

一般教科でも道徳でもアプローチの仕方。社会科、3年の公民、人権、自己決定権。延命治療、尊厳死。自分だったらどうしてほしい。楽に死なせてほしい。立場を変えて、親だったらどうするか。生徒に伝えたい熱いものがあるかどうか？自分の中で生きること死ぬことを考えてゆきたい。

K先生

遠くから通って疲れた。重いテーマを真面目に考えすぎた。授業ではなく、自分の興味で参加。高校生の頃、生きることの意味を考えたが、大人になっても生きること死ぬことには興味がある。大学の哲学の講義で、「脳死」に関するレポートを作成。結論は出なかったが、永遠のテーマ。小2の担任、蝶や昆虫を飼う。カブトムシ・クワガタは遊び道具。かまきりとトンボを男の子が餌として与えた。何かをしたわけではないが、教師がすべて答えを出すことはできない。意識しないとスルーしていく。意識して、じっくり話をしてみる。日常的なアプローチから始める。死ぬ経験はできない。実践例、生き様に触れること。どういう死に方をしたいですか？映画「送り人」、納棺師、丁寧に丁寧に、美しい、ああいう終わり方

がよい。

O先生

アットホーム、生物ではドライになりがち。食物連鎖。遺伝。多様性。生き残る可能性。牛の目玉の解剖。

I先生

自分の死生観、感情・気持ちを育てる。ネグレクト、心を開かない。どう崩していくか？ 自分の障害観。人権。地域格差。関西にいた。(岩手大→昨年、兵庫教育大の大学院で学ぶ)

中村

- ・団塊の世代。来年還暦。いつ死んでもおかしくない。他界からの目と「一期一会」。普通に感謝。求めない。世の中は、なめてはだめですが、だいじょうぶ。怯えることはない。生きてることに感謝しながら頑張りましょう。